

群馬県桐生西宮神社における「福男選び」創出に関する一考察

荒川 裕紀*

A Study on the Invention of the “Lucky Man Race” at Kiryu Nishinomiya Shrine

Hironori ARAKAWA

ABSTRACT

This study examines the recent establishment of the “Lucky Man Race” at Kiryu Nishinomiya Shrine in Gunma Prefecture, launched in November 2024. Inspired by the nationally renowned ritual held at Nishinomiya Shrine in Hyogo Prefecture during the Toka Ebisu festival, similar events have emerged across Japan since the early 2000s. Among these, the Kiryu event stands out as it is hosted by the only direct branch shrine of Nishinomiya Shrine in the Kanto region. Integrated into the local Ebisu Worship Association's Annual Pilgrimage (Ebisu-Ko), the race closely replicates the original ritual's structure with deliberate emphasis on legitimacy and fidelity. Fieldwork confirms that this reproduction is not superficial but rooted in a conscious effort to preserve ritual authenticity. The paper argues that such legitimacy plays a vital role in sustaining folk religious practices and enhancing their potential for regional revitalization. This case offers a compelling model for culturally anchored festival innovation.

KEY WORDS: EBISU, Fuku-Otoko, The Lucky Man, Shinto, Nishinomiya, Ritual authenticity

1. はじめに

本報告は、群馬県桐生市に所在する桐生西宮神社において、2024年11月に新たに創設された「福男選び」儀礼の成立過程とその文化的・社会的意義を考察するものである。近年、地方における祭礼の担い手不足が顕在化しており、特に新型コロナウイルス感染症の影響による自粛期間は、伝統継承の困難性を一層浮き彫りにした。一方で、武田俊輔(2022)は、コロナ禍が既存の課題を加速させた結果として、継承の仕組みの再編や新たなネットワークの活用による祭礼の再構築が進んだ事例もあると指摘している¹⁾。都市部においては、秋野淳一による神田祭²⁾や渋谷の祭礼研究³⁾に見られるように、企業や新住民の参画を通じて祭礼が地域社会の結節点として機能し、持続可能性を確保する事例も報告されている。

*教養学群

本報告者は、兵庫県西宮神社にて毎年1月10日に催行される十日えびす開門神事「福男選び」について、1997年より継続的に調査を行ってきた。当該神事は、マスメディアによる報道を契機に全国的な認知を獲得し、競走形式を伴う「福男選び」儀礼が各地で創出される契機となった。たとえば、大阪大学と石橋商店街が地域振興を目的として2007年に開始した「えびす男選び(現・えびす者選び)@阪大坂」は、2025年に第19回を迎えるなど、継続的な実践が確認されている。こうした祭礼の広がりには、地域活性化や民俗知の継承を目的とする一方で、元来の開門神事が競走性と映像的魅力を有していたことが、各地での類似形態の創出を促した要因と考えられる。

本報告では、まずこれまでに報告者が明らかにした西宮神社における開門神事の成立過程とその象徴的意味を再提示し、次いで、西宮神社が認定した開門神事

の類似行事と言える宮城県女川町の「復幸男」や岩手県釜石市の「韋駄天競走」などの事例を取り上げ、それぞれの目的と本社との関係性を明らかにする。

その上で、2024年に創設された桐生西宮神社の「福男選び」について、現地調査および関係者へのインタビューを通じてその特徴を分析する。桐生西宮神社は、関東地方における唯一の西宮神社直系分社であり、信仰的にも本社との結びつきが強い。したがって、神社の成立背景や主要祭礼である「えびす講」との関係性を踏まえつつ、新たに創出された儀礼の意図と実施過程を明らかにすることで、祭礼を通じた地域活性化および民俗儀礼の持続可能性に資する要因についての考察を試みるものである。

2. 西宮神社における十日えびす開門神事の概要

「十日えびす開門神事福男選び」は、兵庫県西宮市の西宮神社において毎年1月10日に執り行われる神事である。午前6時、正門である表大門が開かれると、前日より待機していた参加者が一斉に走り出し、約230メートルの参道を駆け抜けて本殿を目指す。神社は先着3名を「福男」として認定する。公式には鎌倉時代に起源を持つ神事とされている。本神事は、以下の三期に大きく分けてその変遷を辿ることができる。⁴⁾

(1) 前近代における「忌籠」儀礼

明治期以前、西宮における十日えびすは「忌籠（いごもり）祭り」として位置づけられ、氏子は祭礼前数日間、各戸において静謐に過ごす「イミ（忌み）」の実践を行っていた。この「いごもり」は、京都府南部・祝園地区における「いごもり祭り」とも類似性を持つ。忌籠の明けにあたる正月十日には、氏子が駆け足で参詣する慣習があり、これが現在の開門神事における「競走性」の原型と考えられる。

(2) 近代化に伴う儀礼の再編

明治期以降、阪神間の急速な都市化と阪神電鉄の開業により、大阪・神戸方面からの参詣者が増加し、従来の「いごもり」儀礼の維持が困難となった。神社は午前0時に境内を閉鎖し、いごもりの継続を図る一方で、門の開放が象徴的意味を帯びようになり、大正期には開門と同時に参詣者が走り出す形式が定着した。戦時中には、先着者を「一番福」として表彰する慣習が生まれ、「福男」という語も創出された。以降、開門神事は阪神間の若年層（当時中学生）を中心とした競走儀礼として認知され、新聞報道を通じて社会的注目を集めるようになった。

(3) 戦後復興と現代的展開

第二次世界大戦の空襲により社殿の多くが罹災し、

社中での忌籠儀礼は中断されたが、1950年代に復興が進み、福男競走も再開された。1960年代には競走に伴う事故や暴力事件が問題視され、一時期神社が福男の表彰を控える事態も生じた。1970年代後半には、兵庫県北部の漁業関係者による講参拝と若年層の競走が結びつき、信仰的文脈の中で報道されるようになった。1989年の昭和天皇崩御に伴う自粛期間には、宗教性を強調することで儀礼の継続が図られ、祭礼としての神事性が再定義された。さらに、1995年の阪神・淡路大震災以降は「復興」の象徴としての意味も加わり、「福男競走」から「開門神事福男選び」へと名称・認識が変化した。同時にマスメディアによる競走部分の強調により、「走る」神事として全国的に認知され、現在では西宮地域の祭礼を超えて、関西圏の年中行事として定着している。

上記で示した、三期の変遷によって分かることとしては、開門神事福男選びは、忌籠という日本各地で実施されていた民俗儀礼を基としつつも、近代的な発展の中で、公共交通機関を用いた参詣が形成される過程で生まれた、イベント性の強い行事であることが分かる。しかし、高度経済成長以降、昭和天皇の崩御や阪神・淡路大震災などを経ることによって、信仰性が強調されるという、二面性を持つ祭礼である。

3. 開門神事を模した行事

十日えびす開門神事選びは、マスメディアによる報道を契機に全国的な認知を獲得し、競走形式を伴う「福男選び」儀礼が各地で創出される契機に繋がった。「1、はじめに」で述べたように、大阪大学と石橋商店街が地域振興を目的として開始した「えびす者選び@阪大坂」は2007年に創始されている。2010年代には2つの行事が、西宮神社として直接的にも関係することとなった。1つ目は宮城県の女川町での「女川町復幸（ふっこう）祭」における、「津波伝承女川復幸男」である。これは2013年に地元の若者たちが集い、西宮神社に直接「参考にさせて欲しい」との申し出があったことで関係が生まれ、2014年には西宮の開門神事講社講長の平尾亮氏と2014年の福男、さらに西宮神社の神職が女川を訪れ、このイベント開催に加わると同時に、西宮神社公認の行事とした。⁵⁾

もう1つは、2015年に「西宮神社公認イベント」とした岩手県釜石市の日蓮宗日澤山仙寿院と釜石市出身の有志らが共同で行っている、「新春韋駄天競走」である。どちらのイベントも、2011年3月に発生した東日本大震災の津波避難の教訓である、「津波が来たら高台に避難する」を体感させるものとなっており、「走る」



写真1：女川・珠洲・桐生・西宮の関係者（2025. 1. 10）
西宮神社表大門にて開門神事講社撮影

開門神事が有用なモデルとして機能した。

西宮神社としてはこれら2つのイベントにおいて、積極的に支援するのみならず、1月10日の開門神事にこの2行事の「復興男」や「福男」、「福女」を招待し、実際に開門に賛助をさせることを行い、繋がりを生み出している。この二行事が「公認」された理由としては、東北にて多くの死者を生み出し、それに対する祈りと、今後、災害からの対応策を体感させるという民俗知を共有という意味性・宗教性を双方のイベントから見出したことも大きいと言える。そして10年近くが経ち、2025年には前年に震災にて被災した石川県珠洲市の須受八幡宮の神職も賛助するなど、上記の震災関連の文脈で開門神事に参加し、「復興の神事」としての意味合いを持たせている。

同時に、前年の2024年には、今回取り上げる群馬県桐生市の桐生西宮神社の関係者が、開門神事に賛助・見学する機会を得た。桐生西宮神社については、震災復興を目的としたものではないが、その成立過程において西宮神社との歴史的・宗教的な関係が深い神社であることが指摘される。当報告では、次節において桐生西宮神社の成立背景と、当地に広がるえびす信仰を基盤とした祭礼「えびす講」について考察を加える。

4. 桐生西宮神社

桐生西宮神社は、群馬県桐生市宮本町に所在する美和神社の境内社であり、兵庫県西宮市に鎮座する「えびす宮総本社」西宮神社の主祭神であるえびす大神（蛭子大神）を祀る神社である。関東地方において、西宮神社の唯一の直系分社として位置づけられている点は特筆に値する。本報告では、桐生の地において同神社がいつ、いかなる経緯で創建されたのかについて、イン

タビューおよび文献資料をもとに明らかにしたい。

(1) 桐生におけるえびす信仰

群馬県桐生市は、「西の西陣、東の桐生」と称されるように、江戸期より絹織物産業によって繁栄を遂げた都市である。幕府はこの地を商人の町として位置付け、他地域に比べて町衆の影響力が強かったとされる。中世から近世にかけて、絹織物の流通には定期市の存在が不可欠であり、桐生では「夷講前市（えびすこまえいち）」が開催されていた。明和3（1766）年には、来訪者の増加に伴い、警備および火災予防のため代官所に願い出た記録が残されている。

また、桐生の豪商の一つである佐羽家が文政8（1825）年に定めた家定家訓には「西宮大神宮を信仰せよ」との記述があり、福神としてのえびす（蛭子・戎・夷）に対する信仰が根付いていたことが確認できる。

えびす信仰の全国的な広がりにおいては、寛文年間の1663から1667年頃に幕府より西宮神社に与えられた「日本国中像札賦与御免」が重要な契機となった。これにより、桐生を含む北関東地域でも、西宮神社の免許を受けた「願人（がんにん）」あるいは「下願人」が、えびすの御影（神像を描いた像札）を頒布し、信者の獲得に努めたとされる。17世紀までには、一定の信仰圏が形成されていたと考えられる。

なお、西宮神社におけるえびす信仰の伝播には、中世において人形浄瑠璃に通じる人形操り（傀儡子）の活動が関与していた側面がある。近世に入ると、こうした人形操りの役割は次第に縮小し、代わって「御影（みえ）」の頒布が信仰の中心的手段となっていったと推察される。田中宣一によれば

江戸初期にそれまで独自にエビス神に関わってきた各地の小社の神職や民間宗教者のような者を支配下に組み入れ、彼らに頒布免許を発行し、頒布者を増やしていった結果、西宮神社関係のエビス像が全国に広がっていった⁶⁾

とされる。このように、江戸時代中期の正徳4（1714）年には、東北および関東甲信越地域において、えびす信仰の像札を頒布する者が約587名（うち山本勘解由支配が307名、横田勘兵衛支配が約280名）に達していた⁷⁾とされる。この数からも、広範囲にわたり多数の人々がえびす信仰の普及活動に関与していたことが窺える。こうした関東圏における江戸期のえびす信仰の浸透は、桐生地域にも波及したと考えられる。

(2) えびす講の存在

関東地方には、各地に「えびす講」と呼ばれる祭礼が

存在する。その実施時期は、旧暦あるいは新暦の10月20日であり、形式としては関西や九州地方において正月に行われる参詣行事「十日戎えびす・十日戎・十日恵比寿」等に類似している。各家庭ではえびす神を祀り、取引先や使用人に対してハレの御馳走(けんちん汁が供されることが多い)を振る舞い、一家で祝う日とされていた。すなわち、「えびす講」は地域のえびす社への参詣縁日であると同時に、家庭内での祝祭日でもあったといえる。桐生においては、11月19日に各家庭で振る舞いを行い、使用人に小遣いを渡す慣習があり、日付が変わる20日には桐生西宮神社への社参が行われるという形式が、明治時代後期以降に定着したとされる。また、「えびす(恵比寿・恵美壽・夷)講」という語は、江戸時代において商業組合、特に織物業や米穀商の仲間が集う際に用いられていた。えびす信仰を基盤とし、業者間の結束を誓う場として、20日を縁日として集会が行われていたと考えられる。

現在、桐生においては、参詣行事に関して「西宮大祭」との呼称が用いられており、家庭内での「えびす講」と神社への社参とを区別する呼称の定着が進みつつあると考えられる。社参としての「えびす講」は、毎年11月19日午前10時から20日午後10時までの期間に実施されており、特に19日深夜から20日未明にかけての時間帯に参詣者が集中し、最も混雑する傾向がある。このため、世話人による夜通しの対応が慣例的に行われている。⁸⁾

(3) 西宮神社の勧請と祭礼の展開

前節で示した参詣対象である桐生西宮神社は、えびす信仰の総本社である兵庫県西宮市の西宮神社から、明治34(1901)年10月に分霊を勧請し、明治38(1905)年5月に社殿が落成した。勧請の契機となったのは、

明治31(1898)年に桐生本町三丁目の商家が密集する地域で発生した大火である。商人町として町屋が隙間なく立ち並び、乾燥しやすい気候条件も相まって、桐生では度々大火に見舞われてきたが、この年の火災では約70戸が被害を受けた。

さらに、明治22(1889)年に桐生の豪商佐和家が創業した日本織物株式会社が、明治31年には経営不振に陥り、佐和家では取り付け騒ぎも発生していた。こうした災厄と経済的混乱の連鎖を断ち切るべく、町衆が立ち上がり、福神としてのえびす神を総本社である西宮神社から勧請しようとの機運が高まった。

その3年後の明治34(1901)年11月15日、桐生の代表者2名が兵庫県西宮市に赴き、分霊の許可を得て、同年11月20日には美和神社の境内社として桐生西宮神社が正式に認められた。桐生の商人たちは参詣の促進を目的として、信仰組織「請(うけ)」を結成し、近隣の村や埼玉県からは「代参請」、桐生市内からは「一人請」として恒常的な参詣者の確保に努めた。また、第1回の祭礼から相撲興行の企画運営や露店の招致を行い、祭礼の賑わいを創出した。

これらの経緯から明らかとなるのは、桐生の町が江戸期以来、商人・町衆の力が強く、神社の勧請や祭礼の実施においても主導的役割を果たしていた点である。桐生西宮神社には専属の神職が不在の時期も長く続いたが、現在では、桐生の町割が形成された際に建立された桐生天満宮の神職が諸祭礼を執り行っており、えびす講の催行には明治期から続く町衆の組織が今なお支えとなっている。⁹⁾

祭礼当日には、西宮神社本社から献幣使を迎えて祭典が執り行われる。奉納行事としては、美和神社の神楽殿にて神楽、えびす太鼓、福まきが行われるほか、桐生からくり人形芝居の上演もある。神社北隣の桐生が岡公園入口に設けられた特設会場では、芝居、手品、歌謡ショーなどが催される。参道である恵比寿通り、山手通り、本町通りの一部は歩行者天国となり、約20万人の参詣客を集めることから「関東一の賑わい」と称されている。

近隣の高崎市や栃木県足利市においても、えびす講は盛んに実施されている。しかし、桐生西宮神社は近代において正式に西宮神社から分霊を勧請した経緯を有し、「関東一社」と称されている。この呼称には、先人の信仰とその理念を継承し、これに恥じない形で維持していくという強い意志が込められている。また、祭典時には、「本社」西宮神社からの御影札を神社から「一人講」として訪れた参詣者(崇敬者)に頒布する方式を採っている。



写真2：桐生えびす講「西宮大祭」のチラシ
(2025. 3. 8) 報告者撮影



写真3：御影札（カボウサマ）（2025.3.9）
桐生本町（ほんちょう）内店舗にて報告者撮影

桐生ではこの御影札を「火防様（カボウサマ）」と呼称している¹⁰⁾。これは、明治期の大火からの復興の物語が、現在に至るまで地域の記憶として継承されていることを示している。現在の世話人の総務は岡部信一郎氏であるが、彼は、桐生の町衆であった書上家の子孫であり、町衆が主導的に進めてきた祭礼とえびす信仰が受け継がれている。

5. 桐生における「福男選び神事」の創出とその意義

2024年（令和6年）11月20日午前6時、桐生西宮神社において、桐生えびす講「西宮大祭」の一環として「福男選び神事」が初めて催行された。これまで、西宮神社が公認する福男選びの行事は、宮城県女川町および岩手県釜石市において実施されてきたが、西宮神社本社から献幣使を迎え、正式な祭礼として執り行う神社において「神事」の語を冠して福男選びを催行するのは、桐生が初例である。

本報告では、この神事がいかなる目的で企画され、



写真4：桐生西宮神社でのインタビュー（2025.3.8）
左から片山氏、前原氏、岡部氏 報告者撮影

いつ構想され、どのように実施されたのかについて、関係者へのインタビューを通じて明らかにする。インタビュー対象者は、桐生西宮神社総務の岡部氏、福男選び神事（桐生）実行委員会代表の片山翔平氏、そして桐生天満宮宮司の前原勝氏の3名である。

(1) 具体的な発案と目的

前項で述べた通り、桐生市はえびす講において約20万人の参詣者を迎える都市であり、えびす信仰が地域文化として深く根付いている。歴史的にも、関東地方において正式に西宮神社から分霊を受けて建立された神社は、桐生西宮神社が唯一である。

こうした背景のもと、「西の西宮神社本社、そして東の桐生」として、地域の祭礼文化に新たな展開をもたらすことはできないかという構想が、世話人および片山翔平氏らから提起された。2023年夏頃には、全国的に高い知名度を有する西宮神社の「十日えびす開門神事福男選び」を、可能な限りその形式を踏襲しつつ、桐生においても実施できないかという具体的な検討が始まった。

この「福男選び神事」を、桐生えびす講西宮大祭の一環として催行することにより、これまで地域で培われてきた神社の文化資産が、社会的資源として再評価されるとともに、観光資源としての注目を集める契機となることが期待された。

(2) 西宮神社開門神事への派遣と学び

桐生における「福男選び神事」の実施に先立ち、2024年1月9日午後、片山氏と同世代の小山氏の2名が兵庫県西宮市の西宮神社本社にて催行される「十日えびす開門神事福男選び」に賛助者として派遣された。なお、本報告者は当該神事を取り仕切る開門神事講社理事として、桐生からの派遣者2名の応対にあたった。

両名は賛助者としての役割を果たしながら、タイムテーブルの詳細や各行事の宗教的・文化的意味について積極的に質問を重ね、桐生での忠実な再現を目指す強い意志を示していた。午前6時の開門では、門開け（実際には「門押さえ」に近い）も担当し、祭礼の時間へと移行する瞬間の高揚感を、開門神事講社の講員とともに共有した。本報告者が後日、片山氏に感想を尋ねたところ、「映像で見るのとはまったく異なり、開門前の張り詰めた空気が一気に解放され、祭礼の時間へと移る瞬間を肌で感じる事ができた」との返答があった。実際に催行するという強い決意に満ちていた様子が印象的であった。

(3) 準備過程と当日の祭礼の実施

片山氏らが桐生に帰還した後、後援団体として桐生市商工会議所、商店連盟、隣接するみどり市商工会、桐

ても、この「大祓」が神事性および正統性を担保する要素として重要であるとの認識が示されており、創出された神事性が伝播する過程で「正統性」として受容されていく様相が確認された。

桐生における福男選び神事創出の最大の目的は、地域の活性化にあると考えられる。全国的に認知度の高い開門神事福男選びが、地域振興の手段として採用される事例は他にも存在するが、信仰的・神事的側面を含めて既存の祭礼に組み込む形で発展させようとする試みは、桐生が初例である。競走的な側面に焦点が当たりがちなのを、単なるイベントとしてではなく、持続可能な祭礼として定着させることができるかどうかは、今後の経年的な調査によって検証されるべき課題である。

また、福男選びの特徴として、参加の容易さが挙げられる。このような開かれた祭礼が、日本の伝統行事の継続に資する可能性についても、他の祭礼との比較を通じて検討を進める必要がある。

今後の課題としては、関東地方に広く分布するえびす講の実態把握が挙げられる。江戸時代における願人による像札の頒布が奏功し、えびす信仰が地域社会に深く根付いていることが、今回の調査を通じて改めて認識された。今後も文献資料の精査およびインタビュー調査を継続し、えびす信仰の地域的展開とその変容を明らかにしていきたい。

7. 謝辞

本調査に際し、群馬県桐生市の桐生西宮神社関係者の皆様には格別のご高配を賜り、心より御礼申し上げたい。地域創生の行事立ち上げに多忙を極める中、桐生天満宮宮司・前原勝氏には多くの時間を割いてご協力いただいた。また、桐生西宮神社総務・岡部氏には、えびす講に関する知見のみならず、桐生地域の産業史や地政学的背景に至るまで、幅広くご教示いただき、大いに学ぶ機会を得ることができた。地域活性化に真

摯に取り組む桐生の方々と出会い、貴重な調査を実施できたことに、改めて深く感謝申し上げたい。

参考文献・引用

- 1) Shunsuke Takeda : Continuation of Festivals and Community Resilience during COVID-19: The Case of Nagahama Hikiyama Festival in Shiga Prefecture, Japan, Japanese Journal of Sociology, Volume 31, Issue 1: Challenges of COVID-19 Pandemic to Japanese Society pp.56-66 (2022)
- 2) 秋野淳一：神田祭の都市祝祭論－戦後地域社会の変容と都市祭り－ (2018)、岩田書院
- 3) 秋野淳一：渋谷の都市祭りと地域社会、上山和雄編 渋谷 にぎわい空間を科学する (渋谷学叢書 5)、雄山閣、pp.259-296(2017)
- 4) 荒川裕紀：西宮神社十日戎開門神事における歴史の変遷、北九州工業高等専門学校研究報告、第 43 号、pp.105-114 (2010)
- 5) 荒川裕紀：ウィズコロナにおける都市祭礼の在り方に関する一考察－平成期における西宮神社十日戎開門神事福男選びの変遷から－、明石工業高等専門学校研究紀要、第 64 号、明石工業高等専門学校、pp.26-34 (2022)
- 6) 田中宣一：エビス神信仰の研究 (2024)、岩田書院、pp.61
- 7) 西宮神社文化研究所編：西宮神社御社用日記 第二卷 (2013)、清文堂史料叢書、pp.304
- 8) 大道裕宣：桐生を紡ぐよそ者記者のイチオシ桐生 ① (2024)、アオ・ヴェルディ
- 9) 桐生西宮神社：桐生西宮神社遷宮 120 年祭記念誌 桐生から見る福の神えびす様 (2022)、桐生西宮神社
- 10) 平塚貞作：桐生西宮神社遷宮百年祭記念誌 えびす・だいこく・福の神 (2000)、桐生西宮神社
- 11) 柳田国男：「日本の祭」『定本柳田国男集』第 10 巻 (1969)、筑摩書房、pp.153-314